（様式２）報告書

令和５年度　日本語指導拠点校報告書　基町小学校

１　学校の課題

本校には外国籍児童が多く在籍している。日本の滞在期間が短い児童は日本語が十分に身に付いていないことが原因で、学習内容を理解することが困難である状況がある。日本生まれ日本育ちの児童であっても、家庭内言語が日本語以外である家庭が多く、同学年の日本人児童に比べて語彙が乏しい傾向がある。日常生活で使われる言葉は、個人差はあるものの、年齢とともにある程度身に付いてくるため、日常会話はできるようになってくるが、学習場面で使用する学習言語は、自然に身に付くものではなく、意識的に指導しない限り簡単には身に付かない。そのため、教科書や黒板に書かれている文字を読むことはできても、その内容を正しく読み取ることができず、問われていることが分からないことがある。文章を文字通りでしか読めないため、深い思考に繋がらない場面も多く見られる。例えば算数科では、四則計算など、計算問題を解く技能はあっても、文章問題を読み解くことができないため、問われている内容が分からず立式できなかったり、解き方を説明することができなかったりする。学習言語が不十分なことで学習への支障をきたしていることが本校の大きな課題であり、「学習言語能力」を育てることに取り組む必要がある。

２　研究主題

生きた言葉を使い、考える力を伸ばす算数科の授業づくりにおける日本語指導の在り方

３　取組内容

（１）　算数科授業で使用される「学習言語」や児童のつまずきが予想される言語についての授業での指導・支援

算数科授業を行うにあたり、学級担任と日本語指導担当教諭が共に教材研究を行った。まずは教科書に掲載されている「学習言語」を確認し、つまずきが予想される言葉について支援方法を検討した。新しい単元に入る前には「プレ授業」の機会を設け、前学年までに学習した言葉や、その単元の学習をする際に必要となる言葉について全体に指導した後に、新しい単元の学習に臨めるようにした。その際、ICT の効果的な活用を意識し、学習言語の理解に困難さを抱える児童にとっての視覚支援となるような教材を作成して学習を進めた。

学級担任・日本語指導担当は、互いに情報を共有して授業に臨み、場面に応じて個別に学習言語の指導・支援を行った。児童同士の協働的な学びを実現できるよう、抽象的な表現（記号、数、式、言葉）を具体的な表現（図、表、グラフ、半具体物、現実の事物、事象）に置き換えたり、児童が知っている事物に言い換えたりして、思考する場面の充実を図った。また、多くの情報の中から重要な点だけに絞ったり、いくつかに分割したりする「簡略化」や、母国での学習経験がある内容の場合、母語や既に理解している言葉を使って説明する「言い換え」の支援を行った。日本語指導教室での個別学習の際は、会話のやり取りから内容を理解させる「対話」の支援を行うことが多いが、在籍学級での授業の中では、時間が限られるため困難であり、児童同士の教え合いで理解に繋がることもまだまだ難しい。教員が毎時間、事前に児童本人が自ら理解できる手がかりを揃えることは難しいため、タ

ブレットの翻訳機能を使うことで問われていることを自分から積極的に理解しようという意識を高めていった。このことで自発的に課題に向き合えるようになってきている。また、今年度は机間指導を行い支援することが中心であったため、該当児童は分からない場面ですぐに支援を受けながら学習を進めることができたが、一方で、自分で考える前にすぐに質問してしまう傾向も見られた。そのため、依存度の高い児童には、あえて距離を置いて自分一人で考える時間を与えるようにしたり、日本語の能力に課題のある児童でも自分の考えをもてるようにタブレットなどを利用して写真を見せるなど視覚支援を行ったりするなど、学級担任と相談しながら、より児童の実態に合った個別の支援の方法を考えて行うようにした。

また、児童の算数科における学習言語の獲得状況を把握するために、各学年の学習内容をそれぞれ１０問に絞った「算数語彙チェックシート」を作成した。このチェックシートを使って児童の学習言語能力がどのように変化するのかを探った。昨年度は１学年の学習内容の問題を行ったが、今年度は１学年から４学年までの学習内容の問題を実施した。

（２）　算数科学習言語の単元ごとのリスト化

算数科の学習を通して、学習言語能力の育成ということに力を入れて取り組んでいった。授業を考える際には、昨年度、日本語学習担当者を中心に全学年の算数科の教科書に掲載されている語句の中で「児童がつまずくであろうと予想される言葉」「学習言語として獲得させたい言葉」「難易度が高いと思われる言葉」を選び出した算数科学習言語リストを活用できるように、校内研修でも呼び掛けた。今年度は、特に学習言語について焦点を当てた「プレ授業」において、学級担任と日本語指導担当教諭が支援方法を検討するための資料として使用した。また、昨年度同様に、授業での児童の様子から、難易度が高いと思われた表現、支援が必要であった言葉、他教科でも使われる表現方法（話し言葉、書き言葉）などについても、授業に関わった者同士で情報交換し、適宜リストに加えるようにした。

（３）　「言葉のユニバーサルデザイン」を意識した児童・保護者対応

校内研修会では、誰にとっても理解し易い言葉を使うように心がける「言葉のユニバーサルデザイン」の視点をもって児童への指導や保護者対応を行っていくことを教職員全員で確認し、学校全体で取り組んだ。これは算数科だけでなく、それ以外の教科についても、それぞれの児童の実態を常に念頭において、より理解し易い言葉を選ぶことを心がけた。また、学習の場面以外の学校生活全般、保護者との関わりについても同様に相手のことを考え、正しく思いが伝わるような工夫を考えた。全教職員が、日本語指導教室（世界なかよし教室）での学習のねらいや学びについて共有し、考え方への意識が揃うよう校内研修会を開催した。「基町の多文化共生」についての意見交流の他、個別指導（取り出し指導）や教科指導を通した日本語教育、そして基町小学校で大切にしていく「言葉のユニバーサルデザイン」とは何なのかについて研修した。日々の児童についての情報交換を密に行い、理解できていない様子や場面について連携がとれるようにした。教職員同士の言動でも、伝わりにくい様子

４　検証結果

（１）　算数科授業で使用される「学習言語」や児童のつまずきが予想される言語についての授業での指導・支援

「プレ授業」については、今年度は各学年、算数科の全単元のうち、８割の単元で実施することを

目標にして取組を行ってきた。ICT の効果的な活用を意図的に多く取り入れ、視覚支援を行うことで学習の手がかりになる言葉や場面をよく理解できた児童が多く見られた。教室内に掲示しておいた「プレ授業」で使った資料を授業中に見て確認しながら自分の考えをまとめたり、「この言葉は勉強したから分かる。」と「プレ授業」で取り扱った語彙を自分で思い出したりしながら、その後の学習にも意欲的に取り組む姿が見られた。単元に入る前に学級担任と日本語学習担当者が「プレ授業」の内容や取り扱う語彙について話し合うことで、この単元で身に付けさせたい重要な語彙について共通認識をもって授業を進めることができた。児童も次の単元の学習に必要な語彙を事前に知り、イメージすることができるため、学習に対する見通しをもつことができた。「プレ授業」は言葉の支援としてだけではなく、以前の学習内容を正しく理解しているか、学力として定着しているかを確認する場ともなった。既習学習を振り返る機会をもてたことも安心感につながり、意欲的に学習に臨むことができた。（別紙資料１）

「算数チェックシート」については、今年度は１～４年生内容のチェックシートをそれぞれ２回実施した。結果を分析すると、来日半年程度の児童では、絵や図が無いため、自分で問題を読み取ることが難しく、全く解くことができなかった。在籍１年以上であるが、まだ日本語に課題がある児童については、文章だけでは何算になるかを判断できていなかったり、答えにどのような単位を付ければ良いのか理解できていなかったりした。また、外国籍児童だけでなく、問われた内容に正確に答えることができていない児童が多く見られた。これは何を問われているのか、どういう場面なのかという問いに対する正しいイメージが文章から読み取れていないことが明らかとなった。また、実態によって各学年の正答率に偏りはあるものの、つまずきやすい語彙や表現方法には同じような傾向が見られることが分かった。そのため、「プレ授業」で設問に使われている言葉について図や絵などの視覚支援をしながら説明したり、補足したりして、何を問われているのかを正しくイメージさせることで、２回目の正答率が上昇する結果となった。チェックシートを全員に実施することにより、書き言葉では理解が難しい語彙や表現方法を把握することができた。今後は、設問に対する適切な答え方の指導も継続的に行っていく必要がある。（別紙資料２、３）

（２）　算数科学習言語の単元ごとのリスト化とその情報提供

昨年度作成したつまずきが予想される算数の言葉のリストを「プレ授業」をはじめ、算数科の全ての授業で有効に活用できるように情報提供を行った。しかし、その活用状況を把握するために算数科の授業を行った教員を対象にアンケートを実施した結果、「あまり活用することがなかった。」という回答が半数以上を占めていた。算数科の授業を行うにあたって学級担任と日本語指導担当教諭が、教材研究を行い、その単元で重要な語彙とは何かを確認し合って授業に取り組んできているにも関わらず、情報提供を行っていたリストの有効活用に至らなかった原因として、リストを紙媒体で教員全員に配付をしていなかったことが考えられる。リストアップした算数の言葉は約 1300 語という大量のデータであったために、紙媒体ではなくデジタル媒体でサーバーでの管理を行っていたが、サーバーの中のデータを探すよりも、印刷された紙媒体のデータを見て確認することの方が簡単で速いため、より活用しやすくするためには、デジタル媒体だけではなく、紙媒体で個人の資料として配付する必要性も感じた。

（３）　「言葉のユニバーサルデザイン」を意識した児童・保護者対応

年度終わりの２月に「言葉のユニバーサルデザイン」についてのアンケートを実施し、自身の取り組みの振り返りを行い、その達成度を測った。今年度の授業での学習指導、学校生活全般での児童への対応、保護者対応、全ての項目において「適切な言葉で指導できるようになった。」「適切な言葉で

に伝わることを第一に考えて、「修飾語などを極力減らして一文を短く、端的に伝える。」「過剰な敬語を使うのではなく、礼儀を欠かない範囲で簡単な言葉に置き換えて伝える。」など、誰にとっても理解しやすい言葉を使う工夫をそれぞれが意識してきた。その結果、言葉だけでなく、相手の様子を見ながら絵や図を示したりジェスチャーを加えたり、タブレットの翻訳機能を使ったりしながら、なんとか伝え合おうとする姿勢が大切であるという共通認識が広まってきた。しかし、「支援が必要だと気付くことができるようになった。」という段階の教職員もいる。支援が必要だと気付けていても、具体的にどのような支援をしていけばよいのかまでイメージすることができないことに不安を感じていることが分かった。これは一朝一夕にできるものではなく、経験（児童や保護者との関わり）の中で身に付いていくものであると考える。個人だけで考えるのではなく、日頃から情報交換や相談ができる体制を作るなど、教職員全体で協力し合って取り組んでいけるようにしていくことが重要であると感じる。（別紙資料４）

５　研究成果

昨年度から取り組んでいる「言葉のユニバーサルデザイン」への意識が全教職員の中で高まったことが成果として挙げられる。国籍や日本語の習熟度、理解度に関わらず、最初からできるだけ多くの人が理解できるような言葉を使い、誰にでも分かりやすい表現をすることが基町小学校の掲げる「言葉のユニバーサルデザイン」である。この考え方は児童への教科指導や生徒指導だけではなく、保護者への対応にも重要なものとなることを児童や保護者と関わる全教職員が日々実感している。「この言葉が理解しづらいかもしれない。」「こんな方法を使えば正しく伝わるかもしれない。」という誰にとっても優しい「ユニバーサルデザイン」の視点での工夫に気付ける力を校内研修会や今年度の様々な取組を通じて全教職員で考えてきたことが、児童や保護者との良好な関係を築くことに繋がっていると考える。

「算数語彙チェックシート」によって児童がつまずきやすい傾向のある学習言語の把握を行い、「プレ授業」でＩＣＴを有効活用しながら言葉を押さえ、問われていることをイメージしつつ理解させることができた。そのことでチェックシートの正答率の向上が見られたことも大きな成果である。これも学級担任と日本語指導担当教諭が「言葉のユニバーサルデザイン」という視点を常にもって教材研究を行い、指導をしてきたことがその成果につながっていると考えられる。